

高齢期における死と宗教

川島大輔（中京大学）

高齢者は死を怖れない？

- ❖ 高齢者は若者ほど死を怖れない
- ❖ しかし高齢者間では年齢は関係しない
- ❖ ただし死にゆく過程での痛みなどについての不安は高い（もしくは同等）
- ❖ 若者の死のイメージは漠然としているが、高齢者は具体的

人間の生死を大きな物語（宗教／スピリチュアルな世界観）とむすぶ

- ❖ 秀雄： やっぱり自分らも歳いくとね。いまこれ健康やけど、いつどないなるか分からへんしね。で、いつ死ちゅうもんが訪れるか分からんしね。で、そういうこと考えたらやはり、あのう、先祖とかね、それから仏さん神さんをやっぱり、どっかに持ってんと、不安でしょう。はあはあ。
- ❖ 二重： でなんか、ほんと、守っていただいてるような気がしますね。なんかね。
- ❖ 秀雄： そうそうそうそう。

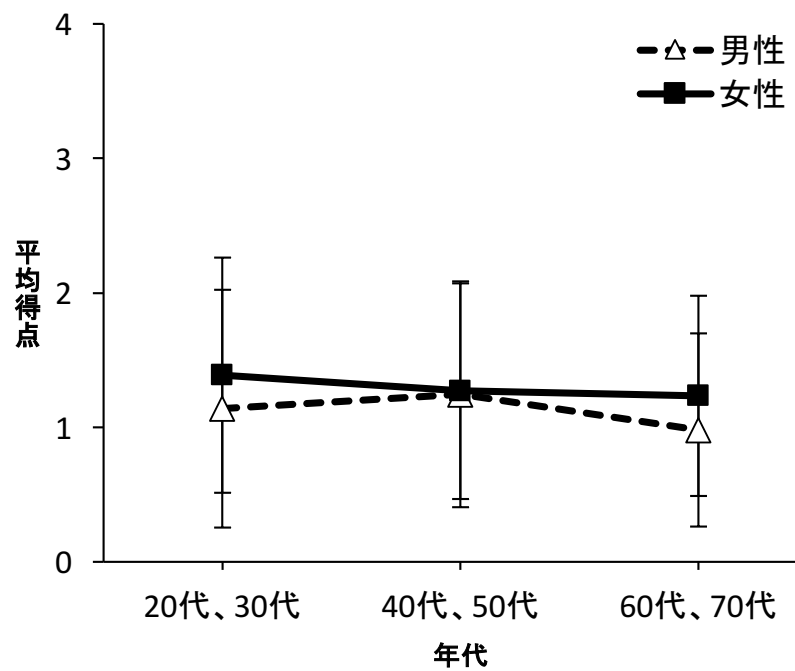


Figure1. 性別と年齢による差異(非存在)

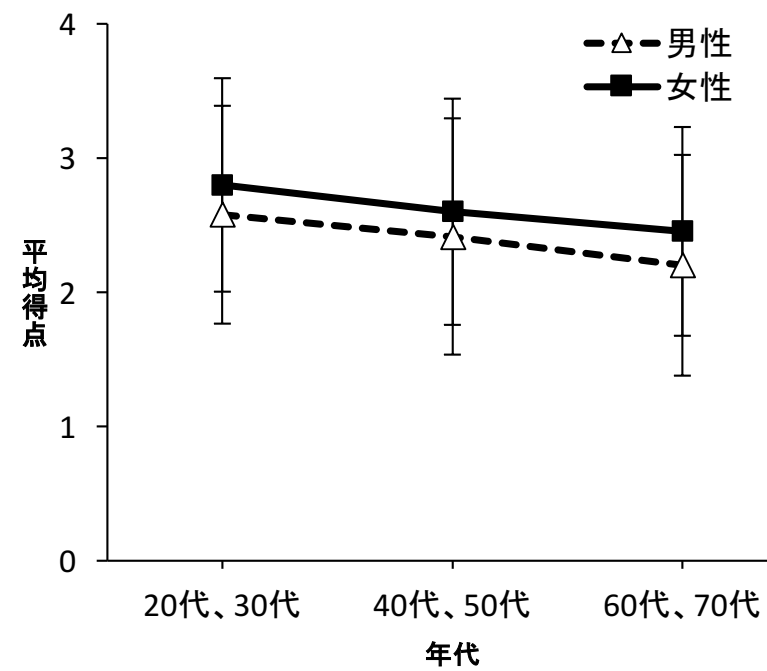


Figure2. 性別と年齢による差異(苦痛)

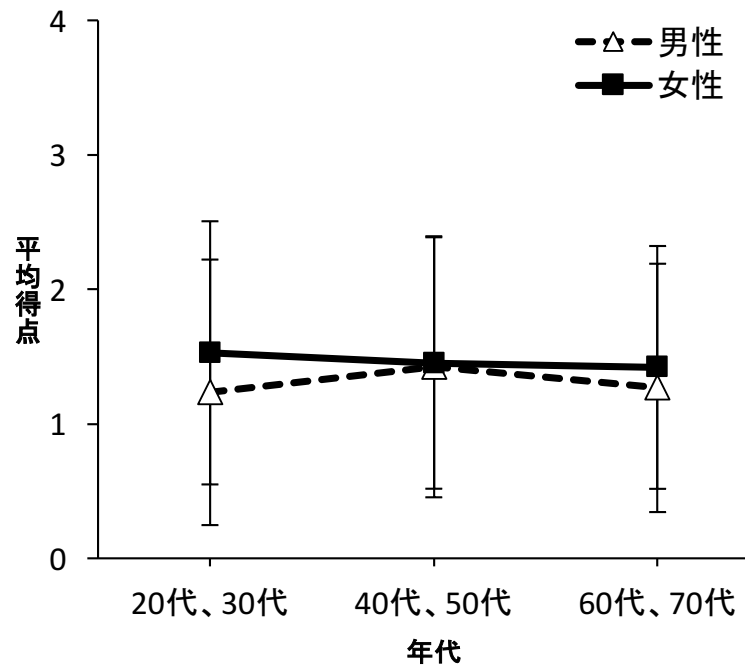


Figure3. 性別と年齢による差異(身体)

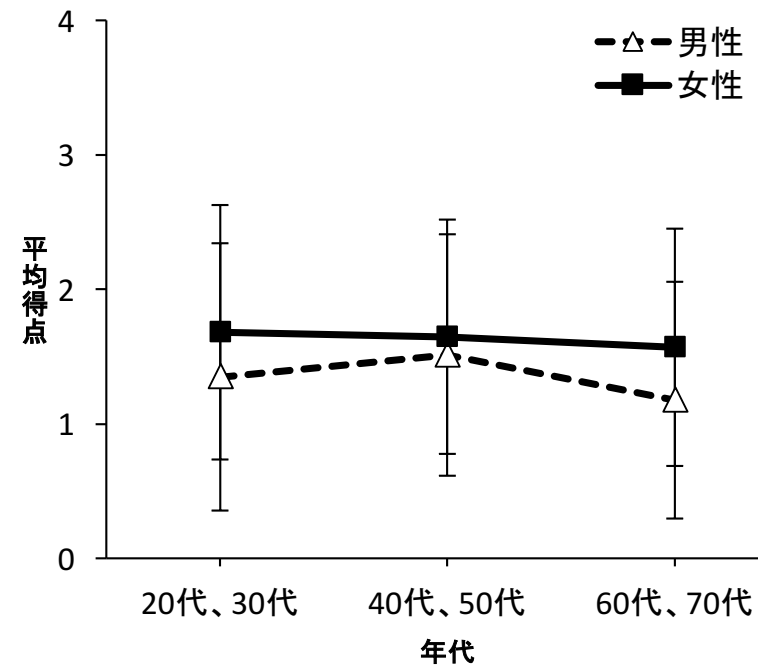


Figure4. 性別と年齢による差異(死後世界)¹⁰

そもそも死の不安は低いほど良いのか？

- ❖ 性別： 男性<女性、非存在のみ 中年期では男女差なし
- ❖ 世代： 身体を除く 下位因子（非存在、苦痛、死後世界）で主効果あり
- ❖ TukeyのHSD法（1%水準）による多重比較
 - ❖ 非存在・・・（**男性のみ**）成人期＝中年期＞老年期
 - ❖ 苦痛・・・成人期＞中年期＞老年期
 - ❖ 死後世界・・・成人期＝中年期＞老年期
- ❖ 性別と世代の交互作用： 非存在のみ有意

死と生の意味づけ

研究紹介

- ❖ 目的：
- ❖ 女性高齢者が、宗教や家という社会文化的文脈にどのように状況づけられながら、死生の意味づけを構築するのかを明らかにする
- ❖ 方法と対象：
- ❖ 1人の女性高齢者（フミエさん）への半構造化インタビュー

川島大輔 (2008). 宗教を通じた死生の意味構成—ある女性高齢者のライフストーリーへの事例検討

人間性心理学研究, 26(1, 2), 41-52.

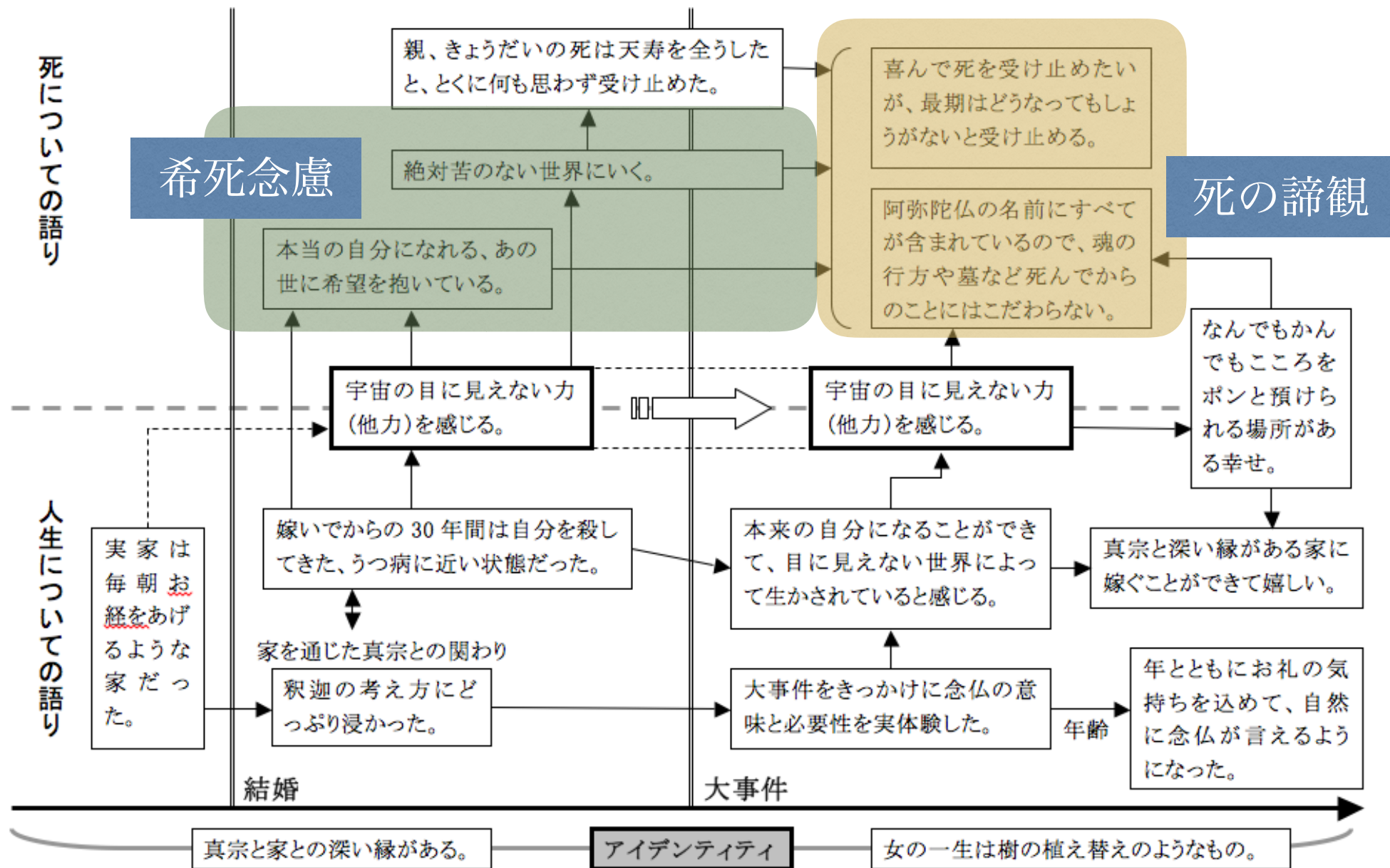


図1 宗教との関わりを通じた死生の意味構成の生涯発達プロセス

注. 図の垂直軸が転機を、水平軸が時間を表わしている。また図の中央より上段が死と宗教についての語り、下段が人生と宗教についての語りを示している。また最下部は、これら死生の意味づけを支える、家という文脈でのCさんのアイデンティティを表わしている。

「死の受容」のアンビバレンス

死生の意味づけが死後世界への期待や現実からの逃避と結びつけられる場合

- あの世への期待を助長させる足場として語られる

生きるための指針や心の拠り所と結びつけられる場合

- この世の満足感や生きがい感を高める足場として語られる

単純に死を諦観できない。

複数の意味が複雑に絡み合って、高齢者の死生観を構成している

1. 現在の生がどのように意味づけられるかが死の意味づけに影響する

1. 自分の尊厳や生きがいを感じる事が難しい場合
早くお迎えに来てほしいと思う

2. 生き生きと暮らしている 死はそれほど魅力的には
語られない

2. 宗教の提供する死後世界の物語がもつ両義性

- ❖ 「終活」はいまや空前のブーム
- ❖ エンディングノートや終活セミナー以外にも，最近では納棺体験，遺影写真の撮影，具体的な葬儀プランの検討などを行う「終活フェア」があちこちで開かれるようになった。

ある高齢者の語り

- ❖ 市江： 自分、自分は、もう、誰も知らん、あの一、いよらへんところで、知らんところで、死にたい。
（笑）そんな感じですよ。ほんまに。もう、病気になって、病院入って、そんなんして、もう、人に迷惑かけたくない、という、それはもう、ものすごく思ってます。ほんまに、ころっと死んだる。（中略）迷惑かけんのはもう、やっぱりねー、もう、後の人がかわいそうですしね、もう、迷惑かけないように、えー、ころっと逝きたいなと（笑）

ぽっくり逝きたい心性の背後にあるものは

- ❖ 死の不安よりも、
- ❖ 「個人の尊厳が侵される」ことへの抵抗感
- ❖ 周囲への負担感と、残された絆の維持
 - ❖ 高齢者介護を取り巻く社会的状況（家族の高負担、家族が介護を担うものという意識など）

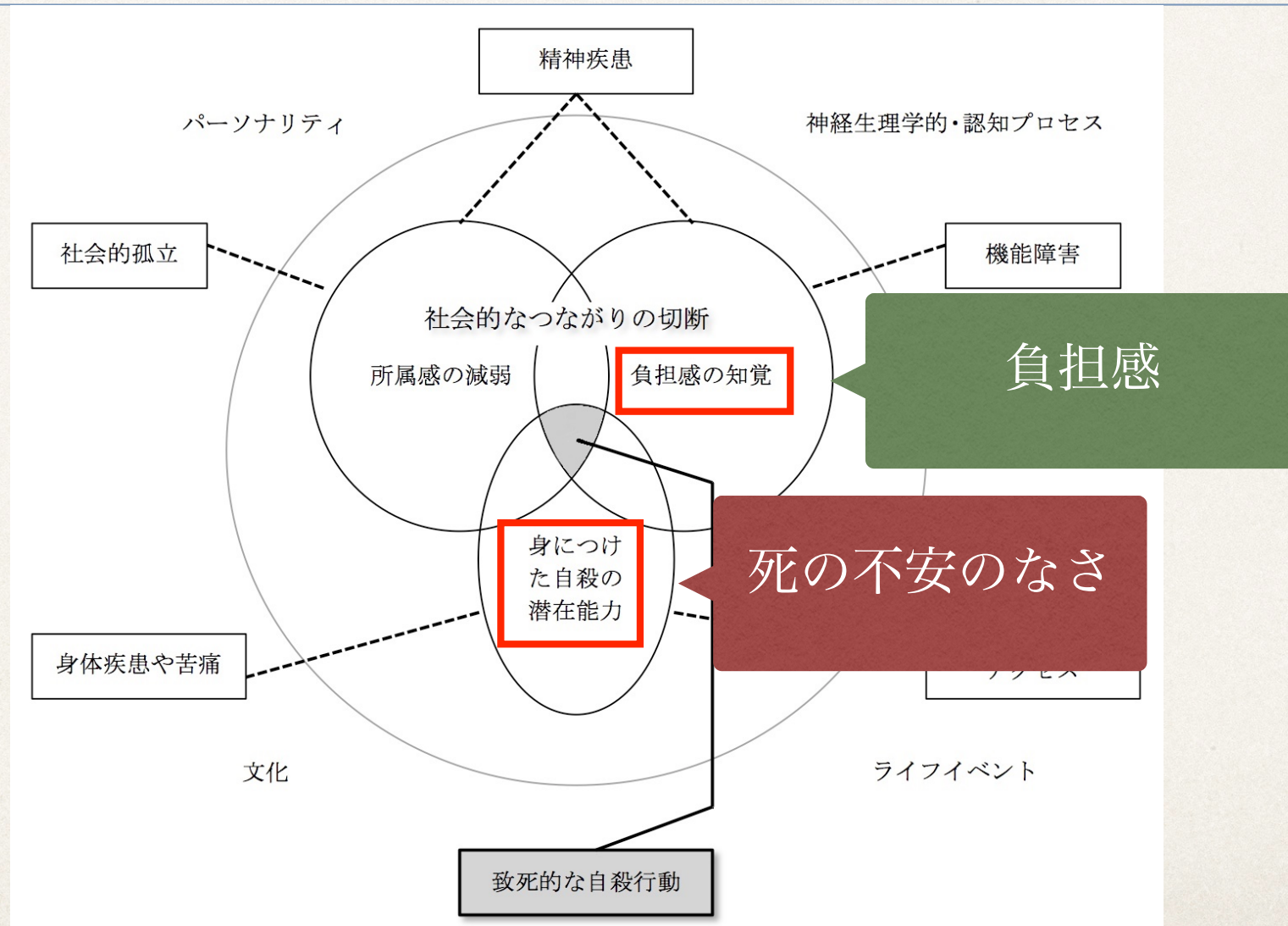
周囲の負担になっていると思うと

1. 本当は自宅での臨終を希望しながらそれを家族に伝えることを遠慮する
2. 積極的なケア（生命維持治療など）を望まない
3. 安楽死（euthanasia）や医師による自殺幫助（physician assisted suicide）を希望し、自殺を考える

McPherson, C., Wilson, K., & Murray, M.A. (2007). Feeling like a burden to others: A systematic review focusing on the end of life. *Palliative Medicine*, 21, 115-128. など

高齢者自殺の対人関係モデル

(Van Orden & Conwell, 2011を翻訳, 一部改変)



Van Orden, K., & Conwell, Y. (2011). Suicides in late life. Curr Psychiatry Rep, 13(3), 234-241.

周囲への負担感と自殺

1. 家族と同居している高齢者の方が独居や夫婦二人暮らしの高齢者よりも自殺者数が多い（高橋, 2004）
2. 無職者，年金受給者の自殺率の高さ
 - ❖ 「（家族や村のものに）迷惑がかかるから自ら死を選ぶこと」が正当化される文化的風土 cf. 檜山節考
 - ❖ 昨今の「私らしい最期」を求める終活ブームの「ダークサイド」（Takahashi, 2014）

-
- ❖ 死の不安のなさに関わるよりも，生の充実を図るべき
 - ❖ 負担感だけでなく，他の要因（所属感の減弱や自殺潜在能力，尊厳（dignity）の喪失）を考慮すべき
 - ❖ 具体的な取り組みとして，
 1. 「社会的なつながり（social connectedness）」の修正や拡張によって負担感を和らげ，所属感を高める取り組み
 2. 尊厳の回復（Chochinov, 2002） cf. 世代継承性文章（generative document）作成，など

再びつなぐ (re-ligare)

超高齢社会で「宗教」に期待すること

religion

- ❖ 自らの命と他者の命を大切にしようとする宗教的信条の醸成
- ❖ 儀礼や居場所の提供を通じた社会的なつながりの拡張